
LEVENAIL

武道じゅーす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LEVELNAIL

【Nコード】

N4985S

【作者名】

武道じゅーす

【あらすじ】

時は大航海時代。

どこまでも続くその海原に、人々は未知の世界を想像し、そして求めるようになる。

いつしかその海のは『世界の最果て』と呼ばれ、その先にあるものは伝説となり、世界中の人間が期待を抱いた。

ときには黄金の都市があると言われ、

ときには減ることのない金銀財宝があると言われ、

そしてときには夢を叶える魔神がいるのではないかとささやかれた。

ただ、その真偽はいまだ誰にもわからない。

何者もその最果てにたどり着いた者はおらず、それどころか、海の遠い先のことについての話はほとんど届いてこなかった。

つまりそれは、航海に出て戻った者があまりに少ないことを示していた。

それでも人々は美しい海に魅了され、まだ見ぬ未開の地に夢を抱いた。

たとえばそれが、どんなに大きな代償を払うことになっても……。

最果てへ（前書き）

携帯小説っぽい書き方になっているのですみませんが読みにくい方もいると思います。

最果てへ

時は大航海時代。

どこまでも続くその海原に、人々は未知の世界を想像し、そして求めるようになる。

いつしかその海のは『世界の最果て』と呼ばれ、その先にあるものは伝説となり、世界中の人間が期待を抱いた。

ときには黄金の都市があると言われ、

ときには減ることのない金銀財宝があると言われ、

そしてときには夢を叶える魔神がいるのではないかとささやかれた。

ただ、その真偽はいまだ誰にもわからない。

何者もその最果てにたどり着いた者はおらず、それどころか、海の遠い先のことについての話はほとんど届いてこなかった。

つまりそれは、航海に出て戻った者があまりに少ないことを示していた。

それでも人々は美しい海に魅了され、まだ見ぬ未開の地に夢を抱いた。

たとえそれが、どんなに大きな代償を払うことになっても……。

港町カルマ。

フィルス大陸フォーランク王国の海沿いに位置する町。

沿岸には数多くの船がやって来ては出発し、やって来ては出発する。

町中は活気に溢れ、毎日のように服を着込み、剣や銃を腰に差して船に乗り込む冒険者達。

それらは、空前の大航海時代を体現していた。

そして……

「なあ、おっさん。この空を見てみるよ」

慌ただしい船着き場で、一人の金髪の青年が船を管理している中年

の男に話しかけている。

「この美しく澄んだ青空……。もし神様ってのがいるなら、そしてこの海の先に行くのが許されないことならば、神様は今出発しようとしている旅人達をこんな空で見送るだろうか」

青年の後ろ腰には一本の剣。柄全体を包帯のような白い布でぐるぐる巻きにしている。

「きっと神様は俺達に言ってるんだよ。『人間達よ。どうか一刻も早く“世界の最果て”を見つけてくれ』ってさ」

そして彼の瞳は、珍しい緋色をしていた。

「な？おっさん、わかるだろう？」

「わかんねーよ！」

中年の男は黙って一気に聞いたあとに怒鳴った。

「そんな思わせぶりな文句でタダで船をくれってか！とんでもねーガキだ！」

青年は飛んできた唾を避ける。

「なんだよ。話のわかんねーおっさんだなあ」

「こっちは商売なんだよ！この町で一番安い船でも30万ペイスはするんだ！お前なんざの財布で買えるか！」

男はあっちに行けとでも言うように手を払う。

青年は顔をしかめた。

「そんなにすんのかよ！ぼったくりだろ！」

「うるせえ！そんなに船が欲しいならスポンサーでも探してこい！どうせお前も冒険者だろ！」

「スポンサーだぁ？アンタ馬鹿だろ？海に出たっきりの奴らをどうやって支援すんだよ！」

「もういいからさっさと行け！“船を買える客”の邪魔だろ！」

「ったく……」

船着き場から少し離れた通りで、青年はだらだらと歩いていた。

周りには民家や商店が建ち並び、立ち止まれば後ろから押されるほ

どの活気と人で溢れかえっている。

「こんだけ人がいてもうけ話の一つもないってのもなかなか不思議なもんだぜ……とっ！」

青年はなにかにつまずき、悪態をついてそれを睨みつけた。

「つたく、なんだ……よ……?」

それはどうやらベルトのようで、革製の茶色のそれにはホルスターが付いていた。銃が入っている。

彼はベルトを拾い上げ、人とぶつからないように通りの隅に移動すると、重みのあるそれを自分の視線の高さまで持ち上げた。

「ガンベルトか。誰か落としたのか？」

よく見てみると、ベルトの留め金部分が壊れかかっているのがわかった。

おそらくそれで落としたのだろう。

ホルスターから銃を取り出し、太陽の光に反射してみる。

「へえ……結構いい銃……だよな?これ」

その真っ白な銃には、全身に細かな黒い紋様が施されている。

彼は銃身の真ん中に位置するレンコン型の弾倉を横にスライドさせ、中を確認した。

「げっ、弾入ってるし。物騒だなあ……」

装弾済みとわかると、青年は手早く銃をホルスターに戻し、コートの内ポケットにしまい込んだ。

と、そこでも思いついた。

「あ、これ売ったら結構な値段になるか？ かなり上等な銃だし。俺って運いい」

と、彼の口角が緩みかけたときだった。

「すみません！ この辺りにベルトが落ちてませんでしたか？」

付近の人間に尋ねまくっている少女が目に入った。

身長は少し低め。肩下まで伸びるつややかな黒髪をしていて、前髪をピンで留めている。

ショートパンツに、白いジャケットを着込んでいた。

そんな彼女が、次から次へと聞く流れでこちらへやって来、青年のほうにも向かってきた。

「すみません！この辺りにベルトがありませんでしたか？」

「べっ…ベルトですかぁ？うーん……」

ガンベルトならありますけどー……

と、自分の中で適当な言い訳のようなものを言い、彼は言葉を濁した。

銃と言っては眉をひそめられるので、あえてベルトと言っているのであるだろうが……。

「あ、ありませんか……」

彼女は落ち込んだ表情で下を見た。

「……ん…？」

ふと、彼女の視線が青年の胸あたりで止まる。

「……………あ……………」

彼もそこで気づいた。

コートの中にしまい込んだはずのガンベルトの端が出ていたのだ。

その直後、青年は思わず走り出し、人混みの中を駆け抜けていった。

「なっ…！ちょっと！」

後ろから彼女の驚いた声が投げかけられる。

そこで青年も走りながら自分に首を傾げる。

「な、なんで俺は逃げてんだ…？」

とっさに足が出てしまったが、これでは完全に言い逃れがきかない。

「やべえ……………こうなったら……………」

思い切って彼は走る速度を上げた。

「やけくそだ！逃げ切るしかねえわ！」

「待ちなさいよ！」

背後の少し遠くから、あの少女の怒声が飛んでくる。

「うっさい！盗みをしようどうせ海に出ればおしまいなんだよ！」

彼は疾走しながらやけくそに言い返す。

少女からの返事はない。

ただ、振り返ってみるとしっかりと追跡してきていることがわかった。

「もう諦めろよ！女の子に勝ち目ねえって！」

青年は最後にそう叫び、角を曲がってすぐの路地裏に逃げ込んだ。

その瞬間、なにかにぶつかる。

「なにすんだ！」

おそらくこの路地裏で生活しているのであろう。

地面に敷いた毛布の上に座り込む、ぼろきれをまとったヒゲだらけの男がわめいた。

「悪い、おっさん」

青年はあの少女がいなくなるまで、この路地で隠れておくことにした。

視線を外の大通りから外し、今いる薄暗い路地に向ける。

地面にはこのヒゲ男のものであろう空き缶、空き瓶、衣服かなんだかわからない布が雑然と散らばっていた。

「おっさん……ずっとこんな生活してんの？」

青年はつぶやくように尋ねる。

「うるせえ。どうせテメーも冒険者だろ」

男は悪態をついた。

「テメーらはみんなそうだ。冒険だとかぬかし、地元の食料や資源を金で持ってちまいやがる。そして挙げ句の果てには海に沈み、汗水流して生産された食べ物魚類のエサだ」

青年は壁に体重を預け、ずるずるとしゃがみ込んだ。

「その口振りからすると、アンタも苦勞した一人みたいだな」

「現実を見ない冒険者風情にはわからんだろうがな、俺だってテーマがいなけりゃ、とつくに一軒家で隠居生活だ」

「なにしてたんだ？」

「しがない農民だ。それでも食うのには困らなかった。それが今の時代が……“大航海時代”とかいうのが来やがった。そのせいで大量の物資は金と夢しか持たない冒険者達に流れ、そして俺の家族の生活は厳しくなった」

青年はおもむろに辺りを見回す。

「……家族は？」

「もういねえよ。妻は子供を連れて、冒険者の男と逃げた」

男の声に、わずかに怒氣が入る。

「俺が汗水流して育てた食い物の……全部持っていっちゃってな…

！」

青年はぼんやりとした目で言った。

「しょうがねえだろ、時代だ。俺だって航海に出ようとはしてるものの、大航海時代によって船の需要は上がり、値段はバカみたいに高くなった。そのせいで船には手が出ず、さ」

男は怒りをぶつけたかったのか、近くの空き缶を持ち上げ、正面の壁に投げつけた。

「物好きな奴らだ。当てのない海の先に魅了されやがって」

青年は肩をすくめる。

「みんなわかってんじゃないの？この大陸にいたままじゃ、いずれダメになるって」

「俺の妻の船も、どうせ今頃海のもくずさ。せいぜい男と仲良く海に沈めばいいんだ」

「なんで沈むって思う？」

青年は問いかける。

「なんでもなにも、それが普通ってもんだろ。航海には海獣やら大^お時化^{おしけ}やらでかなり危険なものだと聞^きいてる」

それを聞いた青年は笑い、すつと立ち上がった。

「やっぱ考え方の違いだよ、おっさん。俺は航海に出た奴らがほとんど帰ってこない理由はそうじゃないと思う」

「……どう思う？」

青年は壁に手をかけ、大通りを覗いた。

「きっとこんなところに戻ってくるのがバカらしくなるくらい素晴らしい場所が見つかったんだよ。もちろん危険もあるだろうが、本当の海の先はそういうものだと思^{おも}うね」

男は少し黙ったあと、静かにため息をついた。

「バカが……」

「うるさい。アンタも働けよ、おっさん」

「なんだと！」

ヒゲの男の文句を聞く暇もなく、青年は路地を出て大通りに再び出た。

辺りを警戒するも、あの少女の姿はない。

「よしっ！撒いたな！」

青年はガッツポーズする。

そして胸の内のガンベルトを確認した。

「あとはこいつをガンショップに持っていくだけだな。あの子には悪いけど」

扉に備えつけられたベルが小さく音を立てる。

ガンショップの中は机がところせましと置かれ、その上には金属的な光沢を放つ拳銃が整列していた。

早速銃を売ろうと思った矢先、店員と思われる一人の少女が前にやって来た。

……少女……？

「よく来たわね……泥棒……！」

青年は正面を向き、はっとなる。

「……マジ……？」

正面に立つ黒髪の少女が行動を起こす前に、彼は全速力で店を飛び出した。

「待ちなさいよ！」

もちろん彼女も追ってくる。

この通りは比較的人通りが少なく、青年は素早く走り抜けることができる。

と、思ったそのとき、背後で乾いた破裂音がし、その直後に疾走する青年の頭上になにやら大きな物が降ってきた。

自分の進行方向の地面に大きな影ができたことでそれに気づいた彼は、素早く体を横に反らし、転がって降ってきた物を避けた。

転がってからしゃがんだ状態に体勢を立て直し、素早く降ってきた物を確認した。

なんだこれ……ベランダか……？

ひとまず立ち上がろうとしたそのとき、自分の後頭部に冷たく固い物が当たった。

「捕まえた！」

ゆっくり振り向くと、あの少女がこちらに向けて至近距離で黒い銃を構えていた。

「え……銃持ってるの？」

青年は無意識に自分の懷にしまっている白い銃を確認した。

「二丁目……！」

少女は息を切らしながらも勝ち誇ったように言った。

「ま……マジか……」

青年は苦笑して、ふと隣に落下したベランダの上を確認した。

民家の二階の窓の近くに、切れた細い金具が見える。

「走りながらベランダを撃ち抜いた技術は認めるけどさあ……よくも町中で、しかも人の家のベランダにぶっ放せたもんだぞ」

「私が外すわけないし、あの家は空き家だし」

彼女は自信たっぷりに言った。

「あと、目立ちたがり屋ね」

青年は周囲の野次馬を見てから付け加えた。

そして、額に銃を突きつけられながら続けて言う。

「さて問題。この至近距離で一番強い武器は銃でしょうか？」

「当たり前でしょ」

彼女は苛立ちつつも答える。

青年は笑った。

「まあ、戦闘に関しては素人さんってことかね……」

そう言った直後、少女は銃の先で彼の額を小突いた。

「いてっ！」

「挑発してるわけ？こっちは人差し指を動かすだけで君を黙らせるるんだけど」

と、そのときだった。

「動くな！」

青年に銃を突きつけていたはずの少女の後ろから、誰かがさらに銃を突きつけたのだ。

「ど、どんな状況だよ……」

青年は思わず苦笑を浮かべた。

少女は青年から向けていた銃を外し、腰のホルスターにしまつて後

ろを向いた。

彼女に銃を向けていたのは、四人ほどの仲間を引き連れた茶色の革の制服を着た男、保安官だった。

「げ……保安官かよ」

青年はつぶやく。

五人の中の一人、少女に銃を向けている保安官が言った。

「両手を頭上にして後ろを向け」

少女はしぶしぶ言われた通りにし、銃を取り上げられた上に、後ろ手で手錠をかけられた。

「大丈夫かね？」

保安官の一人が、銃を突きつけられていた青年に歩み寄る。

「は、はい……ありがとうございます」

青年は大根芝居で返事した。

もちろん、少女から一秒たりとも怒りの視線が外れることはなかった。

二人は港町近くの保安所で話を聞かれることとなり、保安官達に囲まれてそこに向かった。

一戸建てほどの小さなレンガ造りの保安所には基本的に保安官達が常駐し、そこからパトロールに出発したり、有事の際に駆けつけたりするらしい。

二人は窓のない取調室のような部屋に案内され、真ん中の机に向かい合って座らされた。

そして取り調べを担当するであろう一人の保安官が二人の間に入るように机の横に座った。

「はい、まず二人とも名前」

保安官の手には書類とペン。

「レウィン・トレイヴィーンです」

青年が答える。

「リアナ・ウエノベル……です」

続いて少女がうつむき気味に答えた。

まさかこんなことになるとは思っていなかったのか。

次に保安官は少女……リアナに尋ねた。

「町中で銃を撃つとはどういうことだね。しかも空き家とはいえ、民家のベランダを落として……」

「そ、それは……！この人が私の銃を盗んだからです！」

リアナはきつい目でレウインを睨んだ。

「それは本当かね？」

「え？そんなまさか！」

レウインは両手を激しく振り、目を丸くした。

「この期におよんで……！」

「落ち着きなさい」

保安官がリアナをなだめる。

「じゃあとりあえず、本当に銃を盗んだのか調べようか。コートを脱いで」

レウインは言われた通りにコートを脱ぎ、椅子に掛けた。

さらにコートとズボンの両ポケットの底を引っ張って出す。

保安官は小さく何度か頷いた。

「ないね」

「そんな……」

リアナは啞然とした。

「先輩！港で事件が！」

完全にリアナの問題になりかけたとき、勢いよく扉を開け放って一人の保安官が入ってきた。

先輩と呼ばれた取り調べをしていた保安官は椅子から立つ。

「また港で？ 乱闘か？」

「いえ：それが今回はもっと問題でして……。船が高すぎると言っ
て、冒険者の一団が武装して船に立てこもっているんです！ それも、
少女を一人人質にとって！」

「なんだと！」

そのとき、もしかしたら自分もそうになっていたかというレウイン
の苦笑いには誰も気づかなかった。

「あ、こら、入るな！」

息つく間もなくもう二人が入ってきた。

それは保安官と一人の中年男性だった。

男は焦りきった様子で言う。

「早くどうにかしてください！ 奴らが立てこもってるのはうちの船
なんです！ もう買い手も決まってる大事な船なんですよ！ 船を取り
囲んでる保安官達も、捕まえる気があるんだかないんだか硬直した

まんまで…!」

「あ」

ふと、レウインがその男を見て声を上げた。

「俺に船をくれなかったケチなおっさんじゃねえか!」

「……お前、あんときのガキか?」

男もレウインに気づく。

「おっさん、そんな困ってんの?」

レウインは椅子のコートを取りながら尋ねた。

「当たり前だろ! いったいあの船がいくらで売れたと思って……!」

「じゃあ、俺がなんとかしてやろうか?」

「……………は?」

レウインはコートを着、得意気に笑った。

「そのかわりこの一件が片づいたら、どれでもいいから俺に船を一隻くれ」

男は話にならないと言ったようにうなだれた。

「お前頭おかしいんじゃないのか？ガキに解決できるわけねーだろ！」

「それができるんだって。俺と……」

レウインは突然横に突っ立っているリアナを指さした。

「この子なら」

「な、なに言ってるの…？」

リアナは顔をしかめる。

「簡単だろ。この子が今の人質と交代する振りをして近づき、そいつらを片っ端から撃てばいい。すぐに俺も乗り込んで手伝う」

「そんなことできるわけないだろう」

先輩保安官が冷静に言う。

「……そいつらの配置は？」

レウインは顎に指を当て、船売りの男と一緒に入ってきたもう一人の後輩保安官に尋ねた。

「奴らは……全員で五人。唯一の乗り口である甲板へのハシゴは一人が見張ってて、甲板を三人がうろつき、一人が窓から様子を見つつ船内で人質を。その船で逃げられないのは、まだ燃料が積み込まれておらず、マストも張られていないためだ」

それを聞いたレウインはリアナに言う。

「よし、じゃあナイフも持っていくといい。そこで人質交代で船内に入ったら、中の一人をナイフで刺す。何人かついて来たならそいつらも刺す。そんで甲板に出て、残った奴らを撃てば終わりだ」

「で、できない！」

リアナは怒鳴った。

「え？」

「一般人にそんなことができるわけがないだろう。ましてや、全員

殺すなど……」

保安官も言う。

「……だよなあ……」

レウインはため息をこぼした。

「じゃ、俺が一人で行くからいいよ」

「なんでそうなるわけ……？」

リアナは呆れ調で言う。

「だいたい、私の銃をいったいどこに……」

「手伝ってくれたら返すつもりだったんだけど」

レウインはいたずらっぽい表情で言う、腰の後ろにある剣に触れた。

「ま、自分でやるしかないよな」

「……アンタって、最悪っ！」

「うるせー」

「待て待て待て待て！勝手に話を進めるんじゃないやねえ！ありや俺の船なんだ！」

男が口を挟む。

「そうだ。これは我々が解決する問題だ」

保安官も続けざまに言う。

レウインは頭をかいた。

「え〜？いいだろうべつに」

「ダメだ！一般人にそんなことはさせられない！」

いっこうに認められないことに観念したのか、レウインは保安官に歩み寄った。

「じゃあ、俺が一般人とは違うってことを証明できればいい？」

「なにを……」

その瞬間、レウインは保安官の腰にあった拳銃を奪い取り、素早く飛び退いて距離を置いた。

「貴様！」

保安官達が動こうとしたのを、レウインは銃口を向けて止めた。

部屋に戦慄が走る。

「はいはいはい待って待って！べつにアンタらを撃とうってわけじゃないから！」

レウインは全員が黙って固まるのを確認すると、前に向けていた銃口をゆっくりと自分の顔に向けた。

「ちよっ…！バカなこと……！」

「いいから見てな」

レウインが自分に向けた銃口と彼の顔との距離はおおよそ20センチ。

「いくぞ」

銃の撃鉄がゆっくりと起こされ、弾丸が発射される体勢に入る。

「待っ…！」

保安官の最後の制止もむなしく、部屋に乾いた銃声が響いた。

リアナが惨状を見ないように目を覆うなか、破裂音のあとは静寂がしばらく続き、全員は愕然としていっこうに立ちつくすレウインを見ていた。

「ほら」

レウインはなにこともなかったかのように口を開き、

「大丈夫だろ？」

顔の前で握られた右の拳をゆっくりと開いた。

手の中からは小さな金属の玉が滑り出し、コツンと音を立てて床に落ちた。

「う、うそ……」

リアナはそらしていた目を向けなおし、血の気の引いた面もちで彼を見据えた。

「弾丸を……止め……た？」

「べつに手を壁にして止めたわけじゃないぞ。そんなことしたら手

に風穴が空く。飛んでくる弾丸を横からキャッチしただけだ」

「そんなことは聞いてない！」

リアナはツッコむ。

「おい……お前、まさか……」

男がかさかさになった唇を動かした。

「なあ、保安官さんよ。こいつに賭けてみないか？」

「なにを……」

保安官は突然の男の推薦に首を傾げる。

「こいつは常人とは違う。アンタ達も今見ただろ？こいつ……ただのガキじゃねえ」

その様子を満足そうに見たあと、レウインは自信たっぷりに聞いた。

「交渉は成立か？」

「おい、あの若いのがなんかするのか？」

「ああ、なんでも一人で突入するらしいぜ」

船に近づくにつれて、船を包囲する保安官達のさらに後ろを取り巻く野次馬達のひそひそ話がよく聞こえてきた。

そして、レウインが包囲する保安官達と横並びになったときには、多くの野次馬の視線が彼に注がれていた。

「人質の身はなんとしても守るんだ。見つからないように船尾に上って、まずは中の人質を」

レウインの後ろの保安官が耳打ちする。

「了解。んじゃ、ここからなるべく離れたところで犯人に呼びかけてくれない？ “お袋さんが泣いてるぞー”とか、月並みなセリフでいいからさ」

レウインは準備体操をしながら言った。

まもなく、レウインの場所から100メートルほど離れたちようど船首の隣に位置する船着き場から拡声器で声が上がった。

『お袋さんが泣いてるぞー!』

レウインは船着き場の端から海に飛び込んだ。

冷たい海水が体を冷やし、水音が耳をふさぐ。

彼は船の下まで潜水し、船尾の下まで泳いでいった。

思った通り、船の横の船尾寄りのところには小さな穴が空いており、そこからイカリが海の底へと降りている。

レウインはイカリの鎖を掴み、それを伝って水上に出た。

『お前をそんな子に育てた覚えはないぞー!』

いまだ拡声器の呼びかけは続いている。

レウインは鎖を伝って穴のあるところまで登り、足をうまくかけて甲板の後ろ、船室のさらに後部にある小さな幅2メートルほどの通り道に降りた。

運良く降りたすぐ正面には船室の裏口があり、前の甲板に出ている仲間達に気づかれずに船室に入ることができそうだ。

壁には窓があるので、窓のない扉の前に立ち、そっと耳を当てて中の音を探った。

無音だ。

しかし、いないはずもない。

ゆっくり考える時間はないと思い、レウインは部屋の中に飛び込んだ。

部屋は執務室のように、真ん中に凹字型の机と背もたれの高い椅子と壁には沢山の本棚がある。椅子には一人の少女が背もたれごとロープで縛られ、口には猿轡さるぐつわをされている。

そして、体格のいい男が一人、机にもたれていた。

二人とも正面の扉のほうを向いていて部屋の隅にある裏口から入ってきたレウインには気づいていない。

レウインは跳躍して机に飛び乗ると、机に体重を預けて立っている男の首を背後から蹴り飛ばした。

男は前につんのめって倒れ、床に強く頭を打った。

「よし、一人気絶」

レウインは机から降りて男の意識を確認したあと、今の状況をなかなか理解できずに目を丸くしている少女に歩み寄った。

ロープを解き、長い金髪のその少女を解放すると、彼女は緊張もロープと一緒に解けたかのようにその場にしゃがみ込んだ。

「お、おい。大丈夫か？」

「は、はい……一時はどうなることかと思って……」

そこまでへなへなと言ってから、彼女ははっとして続けた。

「は、早く逃げないと……!」

「いやあ、それが……この一件を片づけなきゃいけないもので……」

レウインは頭をかく。

「君みたいに可愛い子を派手に助け出したいのもやまやまなんだけど……」

「でも……それなら応援を呼べば……」

「でもホラ、保安官が来たら一人くらい撃たれちゃうでしょ」

「でも、外の人是一人しか銃を持っていなかったと思います……」

それを聞いたレウインの顔が明るくなった。

「あ、マジ？」

「え？は、はい……」

「よし、じゃあここで待ってて」

レウインは笑顔で少女の肩をポンポン叩いた。

「すぐ片づけてくるから」

彼女をそのままにして、レウインは甲板に続く扉の前に立った。

一つ深呼吸をすると、すぐに扉を開け放ち、甲板へと出た。

それと同時に甲板にいる敵の配置を確認する。

『親父さんも泣いてるぞー』

「うるせーよ！」

船着き場側の甲板の端に三人、さらに船首のほうの甲板に乗るためのハシゴの真上に一人。銃を持っているのはハシゴの上の男。

つまりはレウインの位置から見て右に、四人が甲板の端に縦並びになっている状態だ。

それらを一瞬で確認すると、レウインは一番手前の男の首を手刀で打ち、気絶させて甲板から突き落とした。

そこでやつとレウインの侵入に気づいた四人がとっさに身構えるが、レウインはすかさず今落とした男の左隣のもう一人の足を蹴り、バランスを崩してさらに甲板から落とす。

一番奥にいるハシゴ上の男が銃を構えるが、レウインに自分の仲間が一行に並んでいることを利用され、仲間当たる可能性があって撃てない。

三人目の男がナイフを取り出して斬りかかるが、レウインに手首を掴んで止められ、そのまま後ろに押されて四人目の男とともに甲板から落とされた。

「なんだテメーは！」

最後の銃を持った男はレウィンから距離を取り、銃口を向けた。

間合いを取られたレウィンはため息をついた。

「あーあ、四連コンボだったのに」

「うるせえ！死ね！」

男は会話するつもりなどあるわけもなく、ためらわず銃を発砲した。

レウィンは身をひねり、紙一重でそれをかわす。

「俺には当たらないぜ」

まさか彼が銃弾を避けたとは夢にも思わず、男は困惑した。

「は、外したのか…？」

「あのなあ、俺だって金はねーけど、さすがにここまでする気は起こらないわ」

レウインは余裕を持ったまま、目だけは銃から離さずに言う。

男はもう一度銃を撃つ。

しかし、またもレウインはそれを避けた。

「くそっ！鉄板でも仕込んでんのか！」

「冒険者だからって、流行者だからって、なんでも許されるわけじゃないぞ」

さらに弾丸が発射される。

しかし、レウインには当たらない。

「人の話を聞けって……だからお前らは自分勝手にこんなことがでkind」

「くそっ！くそっ！」

男は半ばやけくそになり、再び銃を撃った。

今度は、レウインは弾丸をかわさず狙われた心臓の前に素早く拳を

つくった。

手が開かれ、掴んだ弾丸が甲板に落ちる。

男はそこでようやくレウインの常人離れした力に気づき、顔を青ざめさせた。

「俺の言ってることがわかんねえか」

レウインは先ほどとは違い、真剣な目を男に向けた。

「お前らみたいなのがいるから、冒険者は陰で疎まれるんだ！ なにもかも流行のせいにして、この時代に生きる人を犠牲にするんじゃない！
ねえ！」

男は引き金を引くが、カチツとむなしい音が弾切れであることを示すだけだった。

「ま、参った！ 俺の負け……！」

「お前の降参なんか聞いてねえよ！」

その男も例外なく甲板から落とされたことは、言うまでもない。

レウインは自分だけになった甲板を見渡すと、船着き場からこちらに釘付けになっている観衆に向いた。

息を大きく吸い、両手を大きく振り上げる。

「終わりーーーーー！」

レウインの叫びを聞き、ざわついていた何百もの人々は巨大な歓声を上げた。

さまざまな場所から指笛が吹かれ、数えきれない拍手が港を包んだ。

レウインはふと気づいたように船室に向かい、人質にされていた金髪の少女を連れてきた。

「こちらの可愛い子も無事でーーーーすっ！」

人質の無事と聞いて、港の歓声はさらに高まった。

だが、すぐにその歓声はどよめきへと色を変えた。

「おらああああ！」

同時に怒気を含んだ雄叫びが聞こえ、レウインは左に向いた。

そこには、仕留め損なったのかさっきの男がずぶ濡れでいて、ナイフを握り、斬りかかってくるところだったのだ。

レウインがとっさに少女を後ろに隠し、向かってくるナイフを止めようと手を伸ばしかけた瞬間、一つの銃声が響き、男の持っていたナイフは甲板の反対側にはじけ飛んだ。

その隙にレウインは今度こそ正確に男の後頭部を打ち、意識を奪って甲板から突き落とした。

「あつぶねえ、6コンボとは思ひもなかったぜ……」

再び歓声上がるなか、レウインは人混みの中で胴上げされそうになっているリアナを見つけた。

彼女の右手には、しっかりと一丁の銃が握られている。

「あいつ………すげえ！」

レウインはハハッと笑い、彼女を見据えた。

「おらおら飲め飲め！」

レウインとリアナは港の男達に誘拐……もとい連れられ、酒場で大騒ぎしていた。

「うるせえ無理矢理飲ますな！」

レウインは強引にジョッキを押しつけてくる酔っぱらいを押しつけている。

「なんだよ、若いくせにこんだけしか飲めねえのか！」

「ものにはペースってもんがあるだろうが！てかこんなに俺にばっか押しつけてねーであいつ……リアナに飲ませろ！」

「リアナちゃんは女だぞ！テメーはバカか！」

「バカじゃねえよ！アンタらそんなに飲んだら内臓ぶっ飛ぶぞ！」

すっかり町のヒーローとなってしまうたレウインとリアナは深夜頃によりやく解放され、涼しく静まりかえった通りを歩いていた。

「くっそ……だりい……」

レウインは猫背になりながらだらだらと歩く。

「ちょっと……忘れてない？」

リアナが鋭く言う。

「え？」

「え？ じゃない！ 私の銃返してよ！」

「あー……はいはい」

リアナはウェインに連れられるままに歩き、港の保安所にたどり着いた。

「…… huh? 」

「まあ待ってろって」

するとレウインは一足飛びで保安所の上に飛び乗り、そこにあったガンベルトを取ってリアナに投げた。

「な、なんでこんなところに……」

「ここに連れてこられるときに屋根の上に投げたんだ。意外と気づかないもんだよな」

レウインは飛び降り、答えた。

リアナは本当に安心したような顔を浮かべ、ホルスターに入っている真っ白な銃を取り出した。

レウインはそれを見て罪悪感が浮かび、頭をかいた。

「ごめん……俺、ずいぶん悪いことをした」

彼女は首を振る。

「もういいよ。お金に困ってたんでしょ？」

その言葉に、レウインは笑顔に戻した。

「そっか、そうだよな！俺は金に困ってたし、しかたない部分も…
…いてっ！」

リアナは銃のグリップでレウインの頭を叩いた。

「調子に乗らない！」

「……すいませんでした。いって……コブになったかも……」

レウインは頭をさする。

リアナはガンベルトを腰に回し、留め具をいじりながら言った。

「ねえ、君……明日には航海に出るんでしょ？あ、これ壊れてる」

「ああ、まあな。おっさんとの交渉も無事に成立したし」

そこからずいぶんと間が空き、二人は押し黙る。

そして、沈黙はレウインが破った。

「なんだよ？」

「……私も行きたい」

「……………は…?」

彼女はまっすぐにレウインを見据えた。

同時に夜風が吹き、彼女の夜のような深い黒髪をさらさらと揺らす。

「やっぱりダメ…?」

「いや、一緒に来ること自体はダメじゃねえんだけど……」

レウインは困り果てたようにため息をついた。

「あんまり突然だから……。俺が言うのもなんだが、航海ってのは命を軽く見てる奴がやることだ」

「そんなことない。と……思う…私は」

リアナは小さく返した。

レウインは少し考える様子を見せてから、くるりと背を向けて歩き出した。

「わかった。本当に来たいなら明日の朝に船着き場の七番口に来い

よ」

「……理由とか、聞かないんだ」

「そういうのは聞かないほうが気をつかわなくて済むだろ」

レウインは足を止めずにそう答えた。

「まさかマジで来るとは……」

レウインは引きつった笑みで、スーツケースを引いて七番口にやって来たリアナを見た。

「来ないと思った？」

リアナは腕を組み、準備万端といった様子だ。

「思った。酔った勢いだっただと……」

「それはすいませんでしたね」

リアナはむっとして言う。

「へえ、結局来たのかお嬢さんは」

続いて、すっかりレウインのお相手となった船売りの男がやって来た。

「船の準備はできてるぜ。来な」

「いやゝすいませんねゝ。“タダ”で船をくださるなんてゝ」

レウインは若干イヤミっぽく上機嫌に言った。

すぐにリアナにゲンコツで叩かれる。

「調子に乗らない」

「いってえなあ……はいはいっと」

レウインは頭をさすった。

二人は港の隅にある一つの青い倉庫に案内された。

港の船を収納する倉庫とあって水の上につくられ、海側の大扉を開けばすぐに出航できるようなつくりになっている。

倉庫には大小さまざまな船がいくつも整列しており、レウインは目を輝かせながらそれらを見渡した。

「すげえ〜！どれをくれるんだ？」

「まあ慌てんな。お前らののはこっちだ」

男は笑顔でそう言い、二人を倉庫のさらに奥へと案内した。

連れてこられた倉庫の一番奥には船と思われる大きな白いビニールを被せられた物が存在していた。

その大きさを見るかぎり、問題はない。

「よし、ビニールを取れ」

三人は力を合わせてビニールを引っ張り、船の姿はあらわになった。

クリーム色の木材が使われたその船には装飾も多く、小型ではあるが別段劣化品というわけでもなさそうだ。

「ま、合格点かな」

レウインは満足そうに言った。

「感謝しろよ。なんせこの船はハンパじゃないからな。そこらの船とは違うぜ」

男は説明する。

「マストが三本に自力推進用のパドルが二本の小型帆船キャラベルだ。名前は“セントメール号”。マストとかパドル用燃料の準備は万端。今すぐでも出発できる」

レウインは持ってきていた食料などの詰め込まれた袋を担いですぐに船に乗り込み、リアナもそれに続いた。

「ありがとな、おっさん！なんか甲板がホコリっぽいけどそれは許してやるよ！」

「ありがとうございます！」

リアナも甲板から挨拶した。

海に向かうための倉庫の大扉が開き、セントメール号のパドルが回

転を始め、船は震動とともに前進しはじめた。

開いた大扉から見えた大海原は、巨大で荘厳で、そして言葉では形容しがたいほどの美しさをはらんでいた。

海水は揺らめき、まるで鏡のように太陽の光をきらきらと反射していて、その海と対称的な青空には真っ白なカモメが舞っている。

レウインは潮風に吹かれながら、遠い彼方にある水平線を指さした。

「俺、あの海と空の境界線にたどり着けば、今度は空に昇れる気がするんだ！」

それはあどけない子供のようで、リアナは髪を耳に掛けながら、笑顔で彼の横顔を見据えていた。

船が港から離れはじめ、レウインは船着き場の彼に手を振った。

「ありがとな、おっさん！」

男も手を振る。

「おう、こちらこそありがとよ！」

彼は言葉を繋ぐ。

「助かったぜ！“呪われた船”を引き取ってくれてよお！」

「……………は……………？？？？？」

彼は上機嫌に叫ぶ。

「言っただろ？そこらの船とは違うって！買い手がつかなくて困ってたんだよ！」

「の、呪われた船……！？」

リアナが冗談じゃないといった表情になる。

レウインは慌てて怒鳴った。

「ちよっ！待てやおっさん！どういうことだ！」

「どれでもいいって言ったのはお前だろ？交渉っていうのはこうすんだよ素人！」

「……あんのクソオヤジ！おい！リアナ！港に戻るぞ！」

リアナは首をぶんぶんと振る。

「も、戻るって言っても……どうするの？」

「どうするって……！」

レウインは船室の脇の階段を駆け上がり、船室の上にある舵を取った。

「舵を使って旋回するんだろ！……あれ？」

しかし、舵を回しても動くのはマストの角度だけでパドルの加減は変わらず、船はいつこうに前進を続けるのみだ。

「マジか！どうすんだ！」

「わかんないよー！」

「リアナ！船の説明書くれ！」

「知らないってば！」

「うおおお～～！！ あのおっさん絶対に許さねえぞ！ちよつ、リアナ！ここから撃ち殺せ！」

「そんなことできるわけないでしょっ！」

「ハハハハ！ざまあみろ生意気なガキめ！」

男は船着き場で高らかに笑っていた。

そこに保安官がやって来て、彼に言った。

「いいんですか？あのお嬢さんを一緒に行かせて……彼の素性もよくわからないのに」

男は大笑いするのをやめ、保安官を見た。

「まあ、不安な気もするが大丈夫だろ。そもそも、安心できる航海

なんてものは存在しねえからな」

「それにあの船……いろいろといわくつきではないですか」

「大丈夫だ。最近の冒険者どもは金を持てあました金持ちか現実を見ないバカがほとんどだが、あのガキは違う」

男は水平線にポツリと浮かぶあの船を見据えた。

「お前さんも見たろ？ あいつは冒険者としての“素養”を持って生まれてきた人間だ。あの嬢ちゃんも、この港中の男の中で一緒について行って、生き残る確率が一番高いのはきつとあのガキだ」

「そう……ですか」

「もしかしたらあいつは……あの伝説の冒険者と肩を並べることになるかもな」

保安官は男を見る。

「伝説の……冒険者？」

「なあに、詳しい奴にしかわからん存在だ」

男は美しい海を見つめながら、小さく続けた。

「俺は今まで船を売った人間の顔を二回見たことがない。全員海に出たっきりだからな。ただ、もしかしたら、あいつの生意気な顔をもう一度拝む日が来るのかもしれないと……そんな気がしないでもねえんだ」

海は他の冒険者達が出航するときとまるで同じ様子でいたが、彼はどこかいつもとは違う雰囲気の出を感じ取っていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985s/>

LEVENAIL

2011年10月9日00時14分発行